

佳作

ありがとう

青森県 三沢高等学校二年 四戸 優美

一年前の桜舞う頃、私はこの三沢高校に入学しました。新しい環境での生活がスタートしたのです。

たくさんのとまどいがある中で一番悩んだのは部活でした。悩みに悩んだ結果、中学時代に経験したことのある、テニス部に入部することになりました。テニス部には、明るい先輩、頼もしいコーチ、そして、一緒に笑い合える仲間が居ました。

夏休み。三沢高校は夏季講習には入りません。テニス部は大会に向けて、講習のあと、部活をしていました。しかし私は「高校の夏休みくらい遊びたい！」という自分の願望に負け、部活をサボり始めました。部活に行かずに遊んでいる頃、私以外のテニス部はきちんと練習していました。なんだか心の中にポカんと大きな穴が空いているような気持ちでした。そんな時、私は久しぶりに卒業した中学校を訪問しました。

中学時代、部活でお世話になった先生の元へ行き、あいさつをしました。彼は私が出会った中で、一番大好きで一番尊敬している先生でした。先生の話すこと一つ一つには、しっかりとした理由があり、説得力もあります。そんな先生との久しぶりの再会だったためか、心が弾んでいました。

「おお、ゆみ！久しぶりだな。元気にしてたか。テニス、続けてるのか。」

「はい、元気です。テニスも一応続けてますよ。」
「勉強も、単位を余裕で取れるようにしろよ。」
最終的には、部活も勉強も自分次第だぞ。失敗はだれにでもある。だけどな、そのあとどうするか、成長するかしないかだ。」

私の心が泣きました。

部活も中途半端、勉強もおろそか、文武両道を目指し、三沢高校に入学した自分は、今何をしているのだろう。自分自身に問いかけ、私は前を向き直した。

気持ち新たに、部活へちゃんと行こうと決めました。部活に顔を出すと、元気のいい挨拶が飛び交います。チームの仲間達と、汗を流し、たくさん笑い合い、次の大会に向かって走り出しました。ある時、ふと、自分の気持ちをチームの一人に話しました。

「ありがとう。」

するとその人はニコッと笑って言いました。

「当たり前！SURE. YOU ARE DO
N, T CRY」

それから何ヶ月か経ち、冬になりました。外で行う大会は次々と終わっていき、インドアのシーズンになりました。次の大会に向けて、休み返上で練習しました。練習の内容もガラリと変わり、徹底的な体力づくりと基礎練習になりました。そんな中チームが壊れました。

体力的にも精神的にも疲れ出していて、コーチへの不満や本当にチーム全員が本気で勝ちにいらっているのかという疑問もあり、チームが不安定になったのです。そこで話し合う場を設けました。みんなが真剣に意見を出し、考え直しました。そして、チーム全員の不安や不満は解消され、もう一度目標に向かって走り出しました。全員が半そで半ズボンで気合い十分。お互いに注意し、お互いに助け合い、絆はどんどん深くなっていきました。私は、気付いていなかっただけかもしれない。私の周りには協力してくれる人達がたくさんいることを。

きっとあなたの周りにも、あなたが気付いて

いないだけで、協力してくれる人がいるはずで
す。だからその存在に気付いて、大切にしてい
たい。

周りを信じることに、最後まであきらめない気
持ち。これらが揃えば、失敗なんて怖くないで
す。失敗はしてもいいのだ。肝心なのはそのあ
となのです。それでも、失敗が怖かったのなら、
一度立ち止まって自分自身に問いかけ、それか
らゆっくりと前を向き走り出せばよいのです。
挑戦する気持ちを忘れないでほしい。

最後に、何度も失敗を繰り返して、沢山の迷惑
をかけたはずなのに、見捨てずに温かい目で見
守ってくれた、すべての人にこの言葉を贈りま
す。

「ありがとう」